



2018年10月19日

右派ポピュリズムに向かうブラジル

公益財団法人 国際通貨研究所
経済調査部 上席研究員 森川 央

大統領選決選投票を前に右派ボウソナロ候補が優勢、このまま逃げきりか

ブラジル大統領選挙は決選投票（10月28日）が近づいてきた。世論調査では右派のボウソナロ（ボルソナーロ）候補が59%の支持を獲得し、41%のハダジ（アダジ）候補を18ポイント引き離している（13-14日に実施されたIbope調査）。

7日の第1回投票でボウソナロ候補の支持率は46.0%であった。同氏については、その過激な言動から拒絶率が高く中道票の取り込みは難しいと言われていたが、順調に他候補の票を取り込み、支持率を13ポイント上げてきている。

対抗馬のハダジ候補は苦戦を強いられている。第1回投票時の支持率（29.3%）からの上積みも11.7ポイントとボウソナロ氏を下回っている。注目されるのは、ハダジ氏への拒絶率が47%と、ボウソナロ氏への拒絶率35%を大きく上回ったことである。ハダジ氏は、汚職で出馬を封じられたルラ元大統領から後継者に指名された候補であるが、有権者の労働者党離れは予想以上に進んでいることが明らかになった。

過去の大統領選では、差を詰められことはあっても、第1回投票で第1位となった候補が決選投票で負けたことはない。もちろん選挙には何が起こるか分からないが、選挙戦の期間が以前の90日から45日に短縮されていること、9月遊説中に受けた刺し傷が癒えずボウソナロ氏は討論会をキャンセルしていることが、討論が苦手とされる同氏への追い風となっていることを考えあわせると、ボウソナロ候補がこのまま逃げ切る可能性がでてきた。

南米伝統のポピュリズム

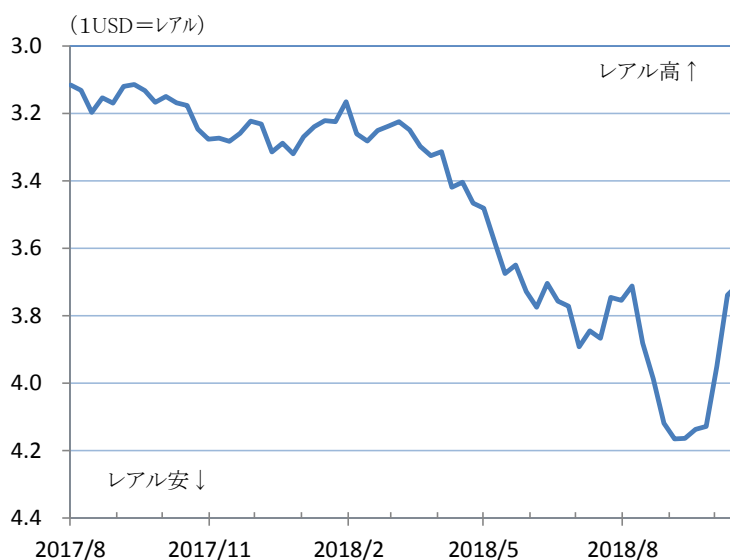
勝者がボウソナロ氏だとすると負けたのは誰か。現地の報道によると、負けたのは労働者党だけではなく既存政党全体という解説が多い。事実、中道右派とされる既存政党は、同日実施された国政選挙で敗北、上下両院で大きく議席を減らした。不況と多発する犯罪に有効な手を打てず、汚職で私腹を肥やす既存政党全体に対する不満が、ボウソナロ人気の理由というのである。

ボウソナロ氏は長年下院議員であるにも関わらず、軍人出身のアウトサイダーであると強調し、腐敗や犯罪撲滅という単純な政策を前面に打ち出した。更に社会問題では、同性婚への反対を表明しキリスト教右派の支持を集めた。

これは典型的な右派ポピュリストの手法である。ポピュリズムの定義にはいくつかあるが、政治的エリートに対抗し大衆側に立つことを標榜するリーダーが現れ、国民の不安や不満をバネに行う政治と言えるだろう。複雑な政治課題に対し、シンプルな解決策を示し支持獲得を狙う。経済問題についても、単純だが強力な施策を提案する。単純な施策を歯切れよく訴える手法は分かりやすく、支持を集めやすい。右派の場合は、宗教的・社会的保守主義を利用し、比較的富裕な層からの支持を獲得することも忘れない。排外主義を利用することも少なくない。

ポピュリズムでも右派ということで、金融市場ではボウソナロ政権への期待が高まり、伯リアルも買い戻されてきている（図 1）。しかし、単純な施策で複雑な経済問題を解決することは難しく、ポピュリズムは一時的な人気は博してもやがて行き詰まる可能性が高い。隣国アルゼンチンのマクリ政権は、もっともわかりやすい最近の例である。冷静な目でブラジル新政権を観察していく必要があるだろう。

図 1 伯リアルの対ドルレート



(資料)ブラジル中央銀行統計を基に国際通貨研究所作成

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべてお客様御自身でご判断下さいませ、宜しくお願い申し上げます。当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。